

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問の都合上、一部手を加えています。)

ここで、ちよつと説明を加えさせてもらうと、<sup>①</sup>妖怪やお化けと幽霊とはまったくちがいます。これに関しては、日本を代表する民俗学者柳田国男(一八七五―一九六二)がしっかりと解説してくれています。まず、妖怪やお化けは幽霊とちがって、出現する場所が定まっています。また、妖怪やお化けは相手を選びませんし、出る時刻がちがいます。幽霊は丑三つ時に出ると昔から相場が決まっています。丑三つ時というのは午前二時から二時半です。それに対して、妖怪やお化けはもつと夕暮れ時など目立つ時間帯に出るのです。

柳田国男はつぎのように言っています。

「人に恨みを含み仇を伏せんとする亡魂は別として、その他のおばけたちは本来は無害なものであった。こわいことは確かにこわいが、キヤアといって遁げて来れば、それでかれらの目的は完了したように見える」

怖いことはそうでしょうが、<sup>②</sup>それに会ったからといって、ひどい目にあうわけではありません。そこが幽霊とはちがいます。

また、興味深いのは、植物や虫といった自然物を妖怪と見立てることが古今東西、ひんばんにおこなわれているということです。『ハリー・ポッター』というイギリスの少年小説があります。ハリーは魔法使いで、ホグワーツという魔法学校で魔法を学ぶのですが、この学校を舞台に、ハリーと友人たちは多くの妖怪や幽霊と出会います。妖怪は、小人や大男といった人間を\*デフォルメしたようなものから、巨大なクモや動く木、動く花などもあります。これらの妖怪は意思をもっています。基本的には魔法使いを含む人間に何かひどいことをされなければ、害を与えるようなことはしません。

タガメという昆虫がいます。このタガメの言葉の由来ですが、ガメの部分は「亀」からの転用ではなく、お化けをあらわす「ガモ」から来ているのではないかと、柳田国男は推察しています(『妖怪談義』)。これは、タガメの水中の挙動が妖怪に似ているからだそうですが、妖怪がじつはタガメのようなものだと思うと、なんだか拍子抜けします。東京付近でも、ちよつと昔は植物の奇形をさして、バケバケと言ったりしていました。

このように考えると、妖怪自体、自然というか生態系なのではないかと思わされます。自然の\*摂理を\*ないがしろにしようとする人間の\*おごりを戒めるために、人間が妖怪をつくりだしたのか、1 自然が妖怪のようなものを人間に見せるようにしたのか。ともかく、そのように捉えると、妖怪が見えるようなまちをつくらうとするのは、けっこう重要なことではないかと思ったりもするのです。

\*河童のクウが現代の東久留米市にあらわれ、「どこにも河童がすめるような場所がねえ」と嘆くとき、<sup>③</sup>観るものはなぜか申しわけない気持ちにさせられます。人が勝手に動植物の生態圏を破壊して、自分たちの都合だけで土地を改変していったことに、どこか本能的に後ろめたさを感じているからでしょう。そして、こんな勝手をいつまでも押し通すことはできない、いつか自然から手痛いしっぺ返しをくらう、と思っっているのかもしれない。

……中略……

しかし、妖怪やトトロは生態系の象徴であると考え、とうぜん配慮するべきものであるはず。ようするに、妖怪(たとえば河童)やトトロがいるかもしれない、と思わせるだけの生態系を保全することで、人間にとっての生活空間ははるかに豊かさを増すと思うのです。

妖怪というと、ちよつとおどろおどろしいかもしれませんが、子どものころの景観が大人になっても残っていることは、なかなかすばらしいことです。これは、まだ最近まで子どもであったきみたちにはピンとこないことかもしれませんが、<sup>④</sup>大人になって子どものころ、よく接していた景観が大きく変化してしまうと、何か大きなものを喪失したように覚えるのです。これは、家のそばの大きな古い木であったり、また古い家であったり、セミを捕りにいったちよつとした林であったりします。

妖怪が見えなくなると、そういうものを大切に思わなくなります。

東京に高尾山という山があります。東京の西部に住む小学生の多くが遠足に行く山です。この山には天狗がすむと言われています。京王線の高尾山口駅から高尾山に登ると、途中に薬王院があります。七四四年に聖武天皇の\*勅命により、東国鎮護の祈願寺として、行基菩薩により開山されたと言われています。この薬王院には二つの天狗の像が立っています。これは、高尾山は天狗がすむ山であるからです。そして、高尾山にはかずかずの天狗の話が言い伝えられています。薬王院の参道には天狗のたこ杉や腰掛け杉などがあり、天狗の伝説を今日に伝えます。

天狗は『日本書紀』にもその存在が記されているほど、古くから日本人と関わりをもっていました。2、昔は、天狗は自然現象そのものとして捉えられていて、いまのような人のような形をもっていませんでした。森や山の精霊として捉えられていたのです。古代の日本人は山、川、大きな木、大きな石などの自然物、または雷、風、雨、火といった自然現象の中に「※」的なものを感じ取っていました。そして、それらを祀ることで、怒りをしずめ、恵みをおよぼしてくれるように祈ったのです。

このように昔の人にとっては、自然は神様そのものだったのです。そして、その神様がより見やすく、そして伝えやすいように具体的な形をとったのが妖怪、妖精であったともいえるでしょう。

それにしても、⑤妖怪は**ずいぶん薄気味悪い存在として伝えられたりする場合があるじゃないか、と思われるかもしれない**。これにも一つの理由があります。日本の妖怪もそうですが、おとしめられた古い神々である場合が多いからです。ここで、古い神々は多くの場合、自然信仰にもとづくものです。3、妖怪とはちよつと異なるかもしれないですが、ヨーロッパにおける魔女などは、キリスト教以前の土着の宗教において重要な役割をはたしていた人たちとも通じています。日本列島には先住民の人たちが多く住んでいました。これらの先住民の人たちのことを、昔の人は「山男」と称して、場合によっては「おぼけ」の列に加えて畏れていたという説もあります。

話があちらこちらに飛んでしまいましたが、妖怪や妖精が自然信仰にもとづいた自然を象徴させるような存在であると考えると、妖怪や妖精がまったく存在できない、人間がそれらを存在していると思えないようなまちなちというのは、自然的要素がほとんどない、まったく無味乾燥なまちなちなのではないかと思われれます。

いやいや、都会にも幽霊話はけっこうあるよ、と言う人もいるかもしれませんが、妖怪と幽霊とはちがうのです。幽霊は自然がないところでも存在できます。もちろん、柳の木があったほうが、怖さを演出しやすいかもしれませんが、それこそ中学校の理科実験室にもトイレにもあらわれることはできます。私たちが望んでいるのは、幽霊ができるようなまちなちではなく、妖怪があらわれるような場所をもつまちなちなのです。

\*デフォルメ……対象を変形して表現すること。  
服部圭郎『若者のためのまちづくり』（岩波ジュニア新書）による

\*摂理……自然界を支配している法則。

\*ないがしろ……あつてもないもののように軽んじること。

\*おごり……思い上がり。

\*河童のクウ……アニメーション映画『河童のクウと夏休み』に登場するキャラクター。

\*勅命……天皇の命令のこと。

問一 1 / 3 にあてはまる語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ただし      イ たとえば      ウ もしくは

問二 ——線①「妖怪やお化けと幽霊とはまったくちがいます。」とありますが、妖怪やお化けの特徴を三つ、それぞれ十字以内で答えなさい。

問三 ——線②「それ」とは何ですか。本文中から五文字で抜き出して答えなさい。

問四 ——線③「観るものはなぜか申しわけない気持ちにさせられます。」とありますが、その理由を四十字以内で答えなさい。

問五 ——線④「大人になって子どものころ、よく接していた景観が大きく変化してしまうと、何か大きなものを喪失したように覚えるのです。」とありますが、筆者は「何か大きなものを喪失した」場所をどのような所だと考えていますか。本文中から二十四字で書き抜きなさい。

問六 本文中の※にあてはまる言葉を、本文中から漢字一字で抜き出して答えなさい。

問七 — 線⑤「妖怪はずいぶん薄気味悪い存在として伝えられたりする場合がある」とありますが、それはなぜですか。次の文がその答えになるように、空らんに合う言葉を本文中から十九文字で抜き出して答えなさい。

妖怪は（十九字）から。

問八 本文の内容に合っているものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 妖怪も幽霊もこの世に存在してはいけないものなので、大人も子どもも危険な場所・時間をさけて行動しなければならぬ。
- イ 生態系の象徴である妖怪やお化けが存在するかもしれない場所を保全することは、人間の生活空間を豊かにしてくれる。
- ウ 妖怪やお化けは自然の象徴なのだから、積極的に妖怪がいそうな場所を探し、友達になれるように努力をするべきだ。
- エ 妖怪やお化けは、自分たちのすみかをうばった人間をにくんでおり、すみかを元通りに戻すまでしつぺ返しを続けている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（設問の都合上、一部手を加えています。）

文化祭が終わると、教室内の空気は十二月の新人戦に向けて緊張感を高めていくようだった。夏の大会ではまだ出場できなかった一年生の中にも、新人戦なら活躍できる子が出てくる。\* マチたちの科学部は関係ないが、運動部の子たちはみな、忙しそうだった。

放課後の教室にも、部活の話題が増えていた。運動部の子たちの顔が心なしか興奮して見える。大変そうだけど、楽しそうだ。

そんな中、ジャージに着替えたみなみがすまなそうに話しかけてきた。

「マチ、今日のことなんだけど……」

科学部に行くしたくをしていたマチは、すぐにピンときた。夏休みに約束して以来、マチとみなみは\* 高坂紙音の家と一緒に訪ねる機会が多くなっていった。お互いに部活がある日を選んで待ち合わせるのが当たり前になっていた。今日も紙音の家に一緒に行くつもりだった。

みなみが言った。

「紙音のところ、今日は私一人で行くよ。陸上部、新人戦前でみんな張りきってるから、科学部よりも終わるの、遅くならないと思う」

「そうなんだ」

「うん。——紙音の家に行くのも、今日はだいたい遅くなっちゃうんだけど」

文化祭の合唱練習の間も、みなみとマチは紙音の家を何度も訪ねた。しかし、応対に出てくるのは最初の日と同じように、いつでも紙音のお母さんだけだった。

一学期の最初、マチの制服の\* しつけ糸を切ってくれたあの子は、今、一人きりの部屋で過ごしているのかもしれない。そう考えると、胸の奥がきゅつとなる。

「私、一人で行こうか」

マチが言うと、みなみがびっくりしたように「え」と呟いた。

「高坂さんの家なら、何度もみなみちゃんと一緒に行ったら、私一人でも大丈夫だよ。みなみちゃん、新人戦の準備で忙しそうだし、明日も朝練があつて早いでしょ？」

「そうだけど、マチを一人で行かせるのは悪いよ。遠回りになるし」

みなみが断りかけたとき、思いがけず、背後から「私、行くよ」という声がした。振り返って、驚く。琴穂だった。

マチとみなみは思わず顔を見合わせる。そんな二人に向け、琴穂がさらに続けた。

「私がマチと一緒に行く。今日はバスケット部、陸上部ほど遅くならないと思うから、ちよつと待っていてくれれば大丈夫だよ。私にまかせて、みなみは部活に行つて」

「助かるけど、でも」

みなみの声を遮るように、琴穂がすばやく首を振り動かしした。

「みなみってさ、しっかりしてるのはいんだけど、一人でたくさんのことを抱えこんでがんばりすぎるんだよね。そんなんじゃ、いつか参っちゃうよ。——今年の新人戦、陸上部の他の子に聞いたけど選手になれそうなんでしょ？」

① みなみの顔にはととした表情が浮かぶ。琴穂がふう、と小さなため息をついた後で笑った。

「だったら、今はそつちががんばり時だよ。もつと頼つてよ。——これまで副委員長なのに全然頼りにならなかったのは、私が悪かったからさ」

言いながら、琴穂がマチを見た。「マチに仕事、だいぶ頼っちゃってたし」と決まり悪そうに告げる。

「マチも、これまで、いろいろごめんね。私、部活を言い訳にしすぎてた。そんなこと言い出せば、みなみだって陸上部が大変なのに、委員の仕事したり、高坂さんの家、行ったりしてたんだもんね」

謝つた後で照れくさそうに目を伏せた琴穂の前に、みなみがとまどうような表情を浮かべる。ややあつてから、おずおずと「いいの？」と琴穂を見た。

「頼んでも、平気？」

「うん」

琴穂が胸を張って頷いた。

② 一連のやりとりを驚きながら見ていたマチの頬がゆるんでいく。「ありがとう」とためらいがちにお礼を言うみなみを、とてもいいと思った。

いつもしっかりしているみなみが自分たちを頼ってくれたことが、嬉しくなる。

琴穂と二人で紙音の家に向かう途中、マチは改めて琴穂に礼を言った。

「さつきはありがとう。みなみちゃん、嬉しかったと思う」

横を歩いていた琴穂が、「だって」と笑う。

「みなみ、完璧すぎるんだもん。あれ、本人何でもないふうにやってるけど、結構大変なはずだよ」

「私も実はちよつとそう思ったことがあつたけど、言い出せなかったんだ。琴穂が言ってくれてよかった」

「うーん。みなみ、たぶん、自分が無理していることにも気づいてないんじゃないかなあ。自分のことって、かえってなかなか気がつけないよね。私もそうだったし」

琴穂が「ごめんね」と頭をかく。

「私も合唱の練習、リーダーなのにちゃんとやってなかった。マチに注意されてはつとしたの」

「私こそ、あのときはキツイこと言っちゃつてごめん」

あわてて謝ると、琴穂が「そう？」と首を傾げた。

「全然キツくなかったよ。むしろ普段おとなしいマチから言われるなんて、③ 私、よっぽどだったんだなって反省した。

——なんか、ありがとね。陰でこそこそうんじゃなくて、面と向かつて言ってくれたから、かえって気分よかったよ」

「そんな……」

頬がかあつと熱くなった。

——はつきり自分の意見が言えない性格を直したい。

今年の四月、マチが中学校に入学するにあたって目標にしたことだ。その一歩が踏み出せたようで④胸の奥がじん、とあたたかくなる。

琴穂から本音の話を聞いたように思えたら、マチもまた、その本音にこたえなくなる。自分のことについて話してみたくなった。

「私ね、『いい子』とか、『真面目』って言われるの、少し嫌なんだ」

今も、琴穂から「普段おとなしいマチ」と言われたばかりだ。おとなしい、優しい、いい子。褒め言葉なのに、マチを息苦しくさせる言葉たち。琴穂がびっくりしたようにマチを見た。

「どうして？」

「自分の意見がはっきり言えない子だとか、面白くない、楽しくない子なんだって周りから思われてるようで、心配で」話しながら、だんだんと胸のつかえが取れていく。絶対に人には話せないと思っていたことだったのに、⑤言葉に羽が生えたようだった。琴穂は相変わらず驚いていたが、⑥聞き終えて大きく息を吐き出した。

「ごめんね、私、マチのことたくさん『いい子』って言った。褒め言葉のつもりだったんだけど無神経だったね」

「ううん。私が気にしすぎるのも確かだから」

「勉強できる子は、悩みなんかないと思ってた。私、マチのこと羨ましかったんだ」

「ええっ？ 私こそ、琴穂は運動神経もいいし、友達も多いから悩みなんかないと思ってた」

お互いに驚いたものの、⑦いつの間にか、一緒に笑っていた。

「本当は私、陸上部に入りたかったんだ」

マチはさらに 1 言ってみた。

「今は科学部が楽しいし、入ったことは後悔してない。だけど、四月の私は勇気がなくて……」

あのときは、琴穂に言われたことを気にしていたのだ。陸上部は練習が厳しいし、先輩たちもみんな怖いからやめた方がいい——、当の琴穂は四月に自分が言ったことを覚えてもないだろう。だけど、その言葉がマチの気持ちに歯止めをかけた。

案の定、「ふうん」と他人事のように頷いた琴穂が、しかし次の瞬間、

2 言った。

「陸上部かあ。確かにマチ、小学校の頃から長距離得意だったもんね」

「え？」

「マラソン大会や体育の時間に見てた。私は最初に勢いよく飛ばして後半バテるのに、マチは根気強いっていうか、ペースに乱れが全然ないんだよね。最初から最後まで自分のペースを守る。すごいなあって思ってたんだ」

すぐに言葉が返せなかった。胸に、ある一文が蘇る。図書室で、見えない誰かが残した手紙。

『がんばってれば、見てってくれるかな。』

見てくれるよ。

胸の中で、呼びかけていた。見てくれる人は、必ず、どこかにいる。手をぎゅつと握り締め、琴穂に向けて「ありがとう」とこたえた。

辻村深月『サクラ咲く』（光文社文庫）による

\*マチ……塚原マチ。主人公で中学一年生の女の子。

\*高坂紙音……マチのクラスメート。

\*しつけ糸……出来上がった衣服の形がくずれないように、折り目などを押さえておくための糸。

問一 —— 線①「みなみの顔にはっとした表情が浮かぶ。」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 新人戦が近づいているにもかかわらず、部活を休むことが多かったために十分な練習ができていないということ

イ 新人戦で選手に選ばれて活躍したいと思っている自分にとって、部活の練習がとても大事なのだということに改めて気づいたから。

ウ 新人戦の選手に選ばれるかどうか、今日の部活の練習で決まるかもしれないという、自分にとって大切な事実を思い出したから。

エ 新人戦に出場したいという強い思いから、友達との約束を果たさないうで自分勝手に行動しようとしていたわがままに気づいたから。

問二 —— 線②「とてもいいと思った。」とありますが、「みなみ」のどのような点が「とてもいい」と思ったのですか。次の中から最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 遠りよがちな態度で他人に気づかいができる点

イ 他の人に多くの仕事を割りふることができる点

ウ どんなことでも一人でできばきと決めていく点

エ 自分のできないことについてきっぱりと断る点

問三 —— 線③「私、よっぽどだったんだなって反省した。」とありますが、琴穂はどのようなことについて「よっぽどだった」と思っているのですか。「自分が」という書き出しで、五十字以内で説明しなさい。

問四 —— 線④「胸の奥がじん、とあたたかくなる。」とありますが、なぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線⑤「言葉に羽が生えたようだった。」とは、どのような状態のことですか。最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 言ったことが鳥のように自由に飛び去っていく状態

イ 言葉がふわふわと空中に浮かんで消えていく状態

ウ 話すと心も軽くなって明るく楽しい気分がする状態

エ 言いたいことが次から次に口をついて出てくる状態

問六 —— 線⑥「聞き終えて大きく息を吐き出した。」とありますが、この時の「琴穂」の気持ちを四十字以内で説明しなさい。

問七 —— 線⑦「いつの間にか、一緒に笑っていた。」とありますが、その理由として最も適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア マチが琴穂に注意をしたことからけんかになっていたのが、自然に仲直りができたから。

イ 相手のことをよく知らないままに、おたがいに誤解していたということが分かったから。

ウ 相手のなやみを初めて聞いて、みんなつまらないことだなやんでいるのだと思ったから。

エ どちらも自分の欠点を直すことができないという点で、似たもの同士なのだと感じたから。

問八 本文中の 1・2 のそれぞれに入れるのに適切な語句の組み合わせとして適切なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 1・ためらいながら 2・予想通りのことを  
イ 1・強気に 2・見当外れなことを  
ウ 1・思いきって 2・意外なことを  
エ 1・調子づいて 2・当然のことを

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線の漢字はひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① インフルエンザが猛威を奮う。  
② 国家の興亡もまた歴史である。  
③ 兄は体重の割にウワゼイがない。  
④ シオが引くと、向こうの島まで渡れる。

問二 次の意味になる四字熟語を、後の語群の漢字を組み合わせ、それぞれ書きなさい。

- ① 非常に珍しいこと、まれなこと。  
② どうにも逃れようのない、差し迫った状態や立場にあること。

命	空	頂	大	体	前	絶	心
氣	一	絶	対	人	絶	小	後

問三 次の熟語について、( ) の指示に当てはまる言葉を後の語群から選び、漢字に直して答えなさい。

- ① 忠言 (類義語)  
② 慎重 (対義語)

ちゅうしん	こうふく	けいこく	けいそつ	ゆうこく
-------	------	------	------	------

問四 次の慣用句の□にはすべて同じ漢字が入ります。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ・ 牛刀割
- ・ 群一鶴
- ・ 鳴狗盜
- ・ □牛後

ア 馬      イ 羊      ウ 兎      エ 鶏

問五 次の熟語の□にはすべて同じ漢字が入ります。漢字一字で答えなさい。

- ・ 就
- ・ 出
- ・ 渡
- ・ □海





解答

一

- 問一 1 ウ 2 ア 3 イ
- 問二 ● 場所が定まっている。

- 相手を選ばない。
- 目立つ時間帯に出る。

おばけたち

人間が動植物の生息圏を破壊し改変したことに、本能的に後ろめたさを感じているから。

自然的要素がほとんどない、まったく無味乾燥なまち

神

(妖怪は) おとしめられた古い神々である場合が多い(から)。

問八

イ

二

- 問一 ア イ
- 問二
- 問三
- 問四

リーダーだというのに、自分は合唱の練習に真面目にちゃんと取り組んでいなかったということ。

自分の意見が受け止められていたことで、自分の意見を言えるようになってきたと感じ、うれしかったか

ら。

エ

ほめるつもりで言った言葉がマチを傷つけていたことを知り、申し訳なく思う気持ち。

ウ

問八

三

- 問一 ① ふる(う)
- 問二 ① 空前絶後 ② 絶体絶命
- 問三 ① 警告 ② 軽率
- 問四 ③ 上背 ④ 潮

航

エ

問五

解説

一

問二

同じ段落の後半で、妖怪やお化けは「出現する場所が定まっています」「相手を選びません」「夕暮れ時など目立つ時間帯に出る」と述べられています。

問四

続く部分に「人が勝手に動植物の生息圏を破壊して、自分たちの都合だけで土地を改変していったこと、どこか本能的に後ろめたさを感じているからでしょう。」とあります。

二

問四

「はつきりと自分の意見が言えない性格を直したい」ということが目標だったマチは、「マチに言われては」として「面と向かって言ってくれたから、かえって気分よかったよ」と琴穂に言われて、「その(目標)の」一歩が踏み出せたように感じていることに着目しましょう。